

## フレンドシップ

2025. 11. 20

幼稚園の4歳児クラスでは、先生が「森のくまさん」の絵本を読んでいる。子どもたちに、この後どうなったかと続きの話を聞いている。子どもたちは考える。自分が考えたことを発表する。なかなか思い通りには話せない。自分が考えたことを絵にしてみる。言葉にできない部分を絵で補う。絵にすることで、言葉が出てくるかもしれない。

5歳児クラスでは、宝とりゲームを行っている。2つのチームが宝をとろうと競い合う。チームごとに作戦を考える。そのための話し合いを行う。話し合いのリーダーとなって、みんなの考えをまとめていく子どもがいる。話すのだが、自分の考えをうまく説明できない子どもがいる。それはこういうことだよねと助け船を出す子どもがいる。作戦を考えられない子どもがいる。考えてはいるのだが、話そうとしない子どもがいる。

このような状況は、小学校でも、中学校にいつても見られる。基本的には、幼稚園と変わらない。友達の前で自分の考えを表現させたいという先生方の願いがある。これから、子どもたちが成長していく過程で、自分の思いや考えを表現できれば、きっと健やかに成長していけるに違いない。幼稚園では、そのための土台づくりをしている。

先生は、どのような題材ならば自分の考えを出しやすいかを考える。どのような設定にすれば発表しやすいかを考える。森のくまさんの続き話に正解があるわけではない。むしろ正解などないほうがよい。正解がないからこそ、自分の考えを出しやすくなる。

宝とりゲームの作戦に大人が考えるような正解がないわけではない。だが、正解を考えることがねらいではない。チームが勝つために、自分なりの考えを出せるようにしたいのである。勝ち負けがあることは、考えを出すためのモチベーションとなる。

なかなか話せない子がいれば、先生は、次の機会ではこうしたほうがよいと考える。そして、やってみる。そのような先生方の計画的、意図的な営みにより、子どもたちは少しずつ変わっていく。今まで話せなかった子が、少しずつ話せるようになっていく。その歩みは決して早くはないかもしれない。だが、一步一步、着実な確かな歩みである。

前述のような話し合い活動を積み上げていくことによって、学級の仲間意識が芽生え、学級集団づくりが進んでいく。これも、小学校へ向けての土台づくりとなる。自分のことだけでなく、友達の考えを受け入れたり、賛同したり、共感したりできるようになっていく。いわば、フレンドシップである。これからも、フレンドシップをもとにした学級集団づくりを大切にしていきたい。